

山岡莊八における作品の変容と連続

——『徳川家康』・「御盾」を中心に——

上 昭 子

一、はじめに

山岡莊八の『徳川家康』は第二次世界大戦で見送った特攻隊員への鎮魂歌として、また敗戦で米ソの監視下に置かれた日本を、今川・織田に挟まれた弱小国「三河」になぞらえて創作されたといわれている。家康は優れた指導力で泰平の世を築いた英雄として描かれ、高度経済成長期には経営者のバイブルとして、「家康ブーム」という社会現象を生む。その一方で敗戦からの復興に立ち上る母と子の姿を、家康と母於太に投影させて、「平和」を願う「母の心」を側面から描いて行く。

しかし山岡の戦中の作品「御盾」は、軍国主義一辺倒の激しさで若者に発信されている。『徳川家康』が死に急いだ者への鎮魂歌なら、「御盾」は若者を戦場へ送る応援歌ともいえるだろう。それは国家権力によって強制されたものだったのか、それとも彼の思想が軍国主義と軌を一にするものだったのか。

たのか。山岡の作品は戦中から戦後へどんな変容を辿ったのか。それとも連続していたのか。そこに焦点を当てて探ってみたい。

二、戦後の復興―散った者と「生き残った者の勤め」

山岡は終戦間際、軍部の報道班員として鹿児島鹿屋で、特別攻撃隊の若い特攻隊員と六十日間生活を共にしている。彼らは山岡に署名帳を預けて飛び立つ。戦後、山岡はその署名帳を抱えて、恩師の長谷川伸を訪ねる。その時のことを彼は、「執筆を終えて」で次のように語っている。

私は署名帳を先生に預けて死ぬ気であつたが、先生はそれを一目で見破り、私が署名帳を差し出すと、これを白ちりめんの帛紗くさに包み直して、私に突き返された。「―これを大切に活かすのだね。それが生き残った者の勤めだろう」声は優しくつたが訓戒は手きびしかった。こうして私は（中略）日々それと対面しながら戦後の右往左

往の中で生きなければならなくなった。

（昭和四十六年九月二十九日 空中観音小堂において）

『小説太平洋戦争』講談社、一九八三年八月

また「徳川家康」を書き出すまでのプロセスについては、『史談家康の周囲』（毎日新聞社、一九八二年三月）で次のように述べている。

しばらくは筆を折って、東京湾内に小さな釣り舟をうかべたまま放心していった。その時ふつと頭にうかんだのが東照権現、即ち、徳川家康公の事跡であった。（中略）私の見送った純真な諸霊を慰める方法は、私に出来得ることで、彼等のうるわしい不安と悲しい犠牲を受け継いで将来に生かすことより手段はなかった。

「そうだ東照権現の長い堪忍の生涯を描いて、戦後の同胞を元氣付けよう」

こうして山岡は戦後まもなく「徳川家康」の準備に入る。しかしこの作品が世に出るにはまだ時間が必要だった。

敗戦によってもたらされたはずの言論の自由は、実際はGHQの統制下¹にあつて、特に時代小説・時代劇、俗に言うところの「チャンバラ映画」は封建的忠誠心を礼讃する産物とみなされ、厳しく統制された。これは裏返せば時代小説・時代劇が、封じ込めなければならないほど国民に愛されていたということである。戦前の軍国主義が復活することをアメリカ

力は極端に警戒したのである。「時代小説の雪どけ」が始まるのは、日刊紙の夕刊が復活（一九四四年三月から廃止になっていた）する一九四九年十一月以降である。『北海道新聞』が夕刊を再開したのは一九五〇年三月二十九日。その連載小説としてスタートしたのが、山岡の「徳川家康」である。

当初この連載は百五十回²ということで、同年八月二十八日で一旦終了する。しかし翌一九五一年元旦から『神戸新聞』『中部日本新聞』を加えた、いわゆる三社連合紙で続編が始まる。連載が終了したのは一九六七年四月。実に十七年間、原稿用紙に換算して一万七千四百枚に及ぶ長編小説になった。単行本は講談社によって昭和二十八年十一月から、新聞連載が終了する昭和四十二年四月にわたって、全二十六巻が刊行されている。山岡は『睨み文殊』（講談社、一九七九年九月）で、連載を「休むと読者から催促がきてね。あの頃はテレビもなかったし」と述懐している。また連載が終了する頃には、「本も二十万部を超えました」と多くの読者に支持されたことを、書籍の売上げで示している。

戸川淳は『歴史小説を斬る』（ミオシン出版、二〇〇〇年一月）の中で「『徳川家康』では、どちらかというと家康は神さまのような人格者として描かれて」いて、「『徳川家康』に登場する家康と、歴史上の家康とは別人と極限することもできよう」と評している。真鍋元之もまた「『狸親爺』でし

かなかつた徳川家康に、すぐれた国家経営者としての全然新しいイメージを付与した」(『大衆文学事典』青蛙房、一九六八年七月) 作品だと述べている。山岡自身は「昭和二八・九・二四」と日を付した「あとがき」(『山岡莊八全集徳川家康第一巻』講談社、一九八一年二月)で「史実の根幹をゆがめてはいない」が、「平和」に対する思いを「徳川家康」に仮託した、「理想小説」だと作品への思いを表明している。

特攻隊員の死から十三年後、山岡は自宅の庭に「空中観音堂」を建て、彼らの署名帳を納め若い霊を祀る。前記の「空中観音小堂」とはそのことである。『徳川家康』が完成すると、彼はまずその二十六巻を「空中観音」に供え、『山岡莊八全集徳川家康第十三巻』(講談社、一九八二年二月)の「あとがき」に次のように記した。

諸霊よ、私はあなたがたに、「後を頼む！」と云われた言葉を忘れてはいない。しかし微力な文学の徒であった私には、こうした方法の供養しか出来なかつたことを、笑って許してくれるであらうか。

昭和四十二年三月二十九日 空中観音小堂において

こうして「散つた者たち」への「生き残つた者の勤め」がひとつの形になつたのである。

三、母の心と信仰

作品は徳川家康の一代記である。しかし『北海道新聞』が夕刊の再開にあたり、山岡に連載を依頼した際、彼は「百五十回ではとても家康が生まれるまではいかない」(『睨み文殊』と語っている。百五十回まではいかないにしても、彼は家康未生以前に多くのページを割いて、家康の母、岡崎城主松平弘忠の妻於大を描いている。特に於大が家康を身籠つた辺りには、平和へのエネルギーが集結しているといえるだろう。於大の母、つまり家康にとっては祖母にあたる華陽院は、「お屋敷」³と呼ぶ嫁であり実の娘である於大に、次のような悲願ともいふべき言葉を投げかける。

「いとしい殿や和子たちを失ふことのない安らかな世が欲しい。その世をうみだすは女子のつとめと思ひます」

(中略)

「もう脇目はふりませぬ。わが胎の児にこの争ひの根を絶つ力をさすけ給へと一向不乱に祈ります。勝つも嘆き、負くるも罪の闕いには眼をくれず、祈つて産んで祈つて育てる。国中の母の祈りがさうなれば、この業火もいつかは消えませう。お屋敷もそれに気づきなされ。戦ひは忘れて、安らかな世をひらく、み仏の化身をわれに与へ給へとお祈りなされ」強い語気でそう言ひきると、母の

尼の澄んだ眼は、はじめてジーンと赤くなる。於大の腹でまたはげしく胎児がうごいた。

『北海道新聞』夕刊、一九五〇年六月十二日

新聞の日付から分かるように、連載が始まって二ヵ月を超えているというのに、家康はまだこの世に誕生さえしていない。しかし「於大の腹でまたはげしく胎児がうごいた」という表現は、華陽院の言葉が家康に伝わったことを暗示している。「争ひの根を絶」ち、「安らかな世」を築く「英雄」は、ここで既に誕生していたと見るべきだろう。

於大の決意は毎夜百杯の井戸水を浴びて、神仏に祈るという行動で示される。前述のように山岡は「史実をゆがめてはいない」と断わっているので、家康の誕生は十二月の二十六日である。水の冷たさはひとしおではなかったはずだ。女たちが一目置けるのは当然であつたが、これを知った家臣の士気はいやがうえにも高まる。尾崎秀樹は『大衆文学論』（勁草書房、一九七九年九月）で、「第一巻『出生乱離の巻』では家康はむつきをつけた嬰兒にすぎない。主人公は父の弘忠だ」と述べているが、果たしてそうだろうか。家康の父弘忠は、自分のように「年寄りどもにまでハラ／＼と氣を使」わない、「強い子を産んでくれ」と於大に向かって「ボロボロと涙を」こぼす、軟弱な城主として描かれている（『北海道新聞』夕刊、一九五〇年六月九日）。

弘忠の気弱さと対照的に、於大はその後も聡明な妻として、母として描かれる。しかしそれも束の間、於大は実家の水野家が敵方の織田家に回つたとの理由で、松平家を離縁される。松平家の老臣たちが於大の警護に当たり国境まで送る。すると於大は家臣に次のように言つて帰還を促す。

もし皆に万一のことがあつたら、竹千代成人の後に、心なき母であつたと、わらはが深く怨まれます。あれほどの武功の者どもを一時の悲しみにとらはれて敵地へ連れ込み、むさ／＼命をおとさせた、うかつな母と云はれます。

『北海道新聞』夕刊、一九五〇年八月二十八日

於大のこの思慮深さが松平家の家臣を待ち伏せていた刺客から守る。於大はこの時一七歳。「百五十回」の連載はここで終了する。やはり「主人公は父弘忠」ではなく母於大と見るべきだろう。

さて先述したように、翌一九五一年元旦から「徳川家康」の続編が再開する。三歳で母於大と別れた家康は、六歳から十九歳まで人質生活を強いられる。その間に八歳で父、十四歳で祖母を亡くし、まさに「戦争孤児」ともいうべき、厳しい環境が描かれていく。ここで山岡は「母の心」を大きく取りあげている。

織田方で捕らえられた家康は死刑が決定する。それを知つ

た於大は単身信長を訪ね助命を申し出る。対する信長は「母の心」に飢えた男である。彼の母が愛しく思っているのは、彼の弟信行である。夫が亡くなったら、家督さえ長男の信長をさしおいて、二男の信行にゆずりたいと思っているほどである。信長は「わしに何を土産に持つて参った？」と尋ねる。於大は「はい。母のころ……それ一つでござりまする」〔『神戸新聞』夕刊、一九五一年四月二十二日〕と決死の覚悟で答える。信長は笑つて於大の嘆願を聞き入れる。母の一途さが徹底主義者信長に届いたのである。

次に家康は今川家に人質として送り込まれる。すると祖母華陽院が岡崎から赴き、家康の養育に当たるが、彼女は「よいか、必らず母はそなたのために何かよい事を考えていくれるゆえ」、「母子の対面、無事に済まされるようにな、常々から心がけていて下され」〔『北海道新聞』夕刊、一九五一年十月一日〕という言葉を残して息を引き取る。家康は華陽院を見送つたすぐ後に、今度は今川家の軍師でありながら、彼に学問の手ほどきをしてくれた雪斎をもまた見送ることになる。雪斎は臨終間際に家康を枕辺へ呼び寄せ、「お許の母はいまだにお許の無事を祈つて、阿古居の城から何彼と心を通わせてくる……これが母の心」「よいか」「母の心はまた、もつとも自然な天地のこころの現れじゃ」〔『神戸新聞』夕刊、一九五一年十月五日〕と諭して眠りにつく。

山岡は「母の心」が常に自分に注がれていることを家康に認識させることで、ともすればすすみがちになる人質生活の中に、未来への一縷の望みをつないだのである。彼の不遇の青少年時代を支えた華陽院と雪斎が、共に仏に仕える身であつたことも、彼の人生に「信仰」という点で大きな影響を与えていると思われる。作品は徳川家康を描くと同時に、信長・秀吉から家康にバトンタッチされる政権交代の物語でもある。

山岡は『徳川家康第一巻』の「あとがき」で、「織田氏も豊臣氏も、やがて今川氏と同じ崩壊の種子を包蔵していた。実は作者の描きたい狙いの一つはそこにもあるのだ」と打ち明けている。これは何を指すかといえば、家康が持ち得て、彼らが持ち得なかつた「信仰心」を意味していると考えられる。祖母から母へ、そして家康へと受け継がれていく「み仏の教え」。徳川家が子々孫々まで続いた要因は、ひとえにそこにあるとほのめかしている。家康が戦場で掲げた「厭離穢土欣求浄土」の旗印もその表れであると言えるだろう。

「大阪冬の陣」で、家康は大阪城から使いにやつて来た女たちに向かつて「よいか。わしの生涯はの、こなた達のような女子供が、戦で良人やわが子を失うことのない……泰平の世をつくりたいと……それ一筋に生きてきた男なのじゃ」〔『北海道新聞』一九六六年三月三十日〕と和平を説く。家康

は最晩年まで無益な戦を避け、豊臣家を「生かそう」とする慈悲深い、見事な国家元首として描かれる。そしてその言葉は、家康がまだ母於大の胎内にいたときに、華陽院が発した、「いとしい殿や和子たちを失うことのない安らかな世が欲しい」という言葉と呼応する。以上のように山岡は母の心と信仰という太い楔を打ち込んで、「理想」の山岡版家康像を確立させたと思われる。

四、戦時下――弾薬としての言葉

『徳川家康』は山岡の戦後の代表作品であるが、戦中・戦前のそれは『富士』と改題された、『キング』に連載した『御盾』（一九四三年一月―一九四五年四月）であるだろう。山岡は一九四〇年従軍作家を志願して、中支、海南島、南支などを一巡している。翌一九四一年、陸軍の命で再度大陸に渡る。一九四二年には大本営海軍部に報道班員として徴用され、北支、中支、タイ、マレー方面に従軍する。それらの体験をもとにして『御盾』は書かれている。『現代日本文学大事典』（明治書院、一九六八年七月）によれば、「当時『キング』に連載した『御盾』は国策に呼応した作品として青少年層にひろく読まれた」という。

『御盾』の「御」とは名詞の上に付くことで、神仏・天皇・貴人などに属するものであることを示して、敬意を添え

る意味を持つ。また「盾」という言葉は、戦時下という状況から判断して、天皇のための「人柱」という意味に解釈してよいだろう。今となつては死語であるが、当時としては時世に即した言葉で、そういう言葉を使わなければならないほど、戦況が悪化していたということである。

作品は時局と平行するように、海軍兵学校の副（校）長が若い訓練生に戦闘要員としての心構えを伝授している。「日本武士道の精粹に鍛へられた俊鷹たちは、傍眼もふらず突込んでゆく」「敵弾に傷ついてよろめきながら一機また一機と、爆弾、魚雷を抱いたまゝ、敵の戦艦に体当りを喰はすのだ!」（『富士』一九四三年十二月号）。「妻が有つては死ぬ時の邪魔になる」「縁談は延して母艦に乗つて、鈍刀も名刀に変わる手本を示して死んでくれんか」（『富士』一九四四年一月号）。さらに「叩ツ斬らなければならぬものがあつたらそこで思ひきり叩つ斬つて来い」「五十万死んだらその屍の上に立つて戦へ!」（『富士』一九四四年四月号）。作品はこのように軍国主義一辺倒の激しさに展開して行く。「青少年層にひろく読まれた」というからにはこれが若者の指針になっていた可能性もある。若者の士気を鼓舞する事を目的に書かれていたといえそうだ。

この連載は終戦の年、一九四五年四月号で終了する。山岡は「作者附記」として、「本稿は一先づこゝで擱筆し、稿

を改めて『大東亜戦争の巻』を開戦前夜の風雲の中から書起してゆきたいと思つてゐる。長い間の「愛読を深く感謝し、併せて日米戦の仍つて来る禍根の深さを洞察せられ、絶対に妥協なき戦いのきびしさを体してご検討あらん事を、切に／＼お祈り申上げて筆を擱く次第である。(昭和二〇・二)」⁽⁶⁾とまるで軍のスポークスマンのような書きぶりを見せる。山岡の作品は大体が会話中心で、心理描写などというものはほとんど存在しない。それが逆に単刀直入に読者の心を動かすという特徴を持つてもいるのだが、この場合それが負の形で若者の心に浸透して行く。その結果、部下は上官のいう「体当り」、つまり自爆すること何ら疑いを持たない。喜んで死を受け入れようとする。その倒錯した描写は一種異常でさえある。

塩澤実信『雑誌一〇〇年の歩み』(グリーンアロー出版、二〇〇四年九月)によると、軍は「雑誌や書籍は、精神の弾薬である」と喧伝し、「精神力を強むる武器である」と声を上げていたという。そして塩澤は「少しでも、戦争を批判し、時局にそむく言辞があるものなら、執筆禁止、発表誌は発禁に付されるようになる」と、「当局」の取締りのエスカレートぶりを指摘している。また当時の『中央公論』の編集長であった畑中繁雄は、戦中の言論弾圧をいかにして逃れるかを次のように述べている。

もはや「奴隷の言葉」によつてなお批判精神のいくらかをでも伝えうるかどうか以外に、道としてはなかったのがある。かくて私たち編集者はまことに非常の朱筆をふるつて、たとえば執筆者の付した題名をことさら、時局むき⁷に変えたり、明確な規定をたんなる可能性にかきかえたり、文章の脈絡だけをつけて気づかれぬように主要部分をこつそり削除したり、ときには威勢のいい形容詞や副詞の類を挿入したり、と言つた「表現の奴隷化」のために神経をいたずらにすり減らす一時期をむかえたのである。

〔日本ファシズムの言論弾圧抄史〕高文研、一九八六年三月

仮に「御盾」にこうした編集の手が入っていたとしても、山岡の言葉そのものが「弾薬」と化している。「妻が有つては死ぬ時の邪魔になる」「爆弾、魚雷を抱いたまゝ、敵の戦艦に体当りを喰はすのだ!」などの表現は、前後のつながりからみて加筆されたものとは思えない。畑中はまた「大衆作家個々人が、八月十五日をどううけとめたかは、大衆文学の戦中と戦後を結ぶ結節点になる」と論じている。尾崎秀樹はその「結節点」を、「山岡は戦争の責任を感じる側にはなくて、被害者の位置に立とうとしているのだ」(『大衆文学の歴史』講談社、一九八九年三月)と述べている。尾崎の考えに

沿えば、山岡は大戦の「被害者」の位置に立ったからこそ、「平和」を求める気持ちが人一倍強かったということになる。

五、おわりに

セシル・サカイは『日本の大衆文学』（平凡社、一九九七年二月）で、山岡のことを「彼は自分の保守的な政治思想を、戦後かならずしも否認したわけではなかった」と指摘している。また『徳川家康』の中で「將軍は日本国内の平和を生み出した人物として描かれているが、権力の観念そのものはけっして再検討されていない」とも指摘している。同じように『現代日本文学大事典』（明治書院、一九六八年七月）にも、山岡の「保守的立場は戦中から一貫しており、『徳川家康』のモチーフも、作者の「平和への悲願」にもとづくとはいえず、いわゆる革新的なものではない。むしろ組織者家康を描きこんだ」と記されている。

これらの指摘は山岡の思想の根底に、封建的な意識があったと見る点で共通している。彼は戦後『徳川家康』を皮切りに、『織田信長』（講談社、一九五五年～一五六〇年）、『豊臣秀吉』（講談社、一九七三年～一九七八年）と書き連ねていくが、庶民の声はどこにも反映されておらず、権力者、統率者の声だけが聞えてくる。それは「御盾」にみる、有無を言わせない上下関係と少しも変わってはいない。敗戦を機に

「献身的な死」から、「平和への願い」へと作品は変容したようにも見受けられるが、彼のスタンスは弱者の側ではなく、常に権力者の側にある。家康が百姓の苦勞を思ったとしても、山岡の眼はその百姓の家に入って、空っぽの米びつの蓋を開けてみることはないのである。

『徳川家康』において、若き日の家康は人質生活を送る、肉親に縁の薄い少年である。しかし彼は紛れもなく、大名の子である。出自の良さからどんな環境にあっても必ず近習がそばにいて、身の回りの世話をする。母於大にしても祖母華陽院にしても確かに政略によつて婚姻、離縁が繰り返されているが、彼女たちは城主の妻である。決して貧しくはないのだ。豊かさの上で明日の「平和」を願うのである。山岡とよく比較される作家に吉川英治がいるが、吉川は庶民の目線で作品を書いた。しかし山岡の作品は、管理する側の目線に立つて進んで行く。高度経済成長期に、「経営者のバイブル」として読まれた理由がそこにあるのかもしれない。

注

- (1) GHQ (General Headquarters, Supreme Commander the Allied Powers) とは連合国軍最高司令官総司令部のことをいう。日本政府および国民は、一九四五年八月十四日、ポツダム宣言の受諾により、同年十月二日～一九五二年四月二十八日まで、このGHQの占領下におかれた。総責任者は連合国

軍最高司令官ダグラス・マッカーサー。GHQの主な政策は、天皇制国家体制の「改体」、戦後の政治・経済・教育・文化の民主化、非軍事化などがあげられる（佐々木毅・鶴見俊輔他編『戦後史大事典』三省堂、一九九一年三月）。山岡は一九四七年一月にポツダム宣言受諾による勅令第一号で、一九五〇年十月まで公職追放を受けている（『山岡荘八年譜』『大衆文学大系』二十八富田常雄・山岡荘八・村上元三集）講談社、一九七三年八月）。

(2) 実際には一九五〇年八月二十八日に百四十八回で終了している。

(3) 華陽院は水野忠政に嫁いだ時五人の子を産んだが、その子どもたちを水野家に残して松平弘忠の父清康に再婚した。清康の亡き後に、城主となった義理の息子弘忠のもとへ嫁いできたのが、残してきた子のうちの一人、於大である。彼女は皆から尊敬と好意を持って、「お屋敷様」と呼ばれている。

(4) 『雑誌一〇〇年の歩み』によると大戦中は横文字は敵性語として使用が禁止されたが、これは雑誌名にもおよび『キング』は『富士』と改題された。

(5) 単行本は「大日本雄弁会講談社」（講談社の前身）より、一九四四年六月に『御盾―兵学校の巻―』が刊行されている。しかしこれは「御盾」の前半部分であり、単行本としては未完に終わっている。

(6) 尾崎秀樹「解説」（『大衆文学大系』二十八富田常雄・山岡荘八・村上元三集）講談社、一九七三年八月）によると、それ

は日本の敗戦によって実現しなかった。しかし彼はその意図は一九六二年七月～十一月まで『講談倶楽部』に連載された「小説太平洋戦争」に引き継がれたとみなしている。ただこの連載は未完のまま終わっている。

※引用に際して、旧字は原則として新字に改め、ルビや傍点は適宜省略した。